

8 家庭科

家庭科における 自立に向かう子どもたち

宮本 真由美

1 はじめに

家庭科は、家庭生活を中心とする人間の生活を学習対象とし、家庭生活などにおけるさまざまな課題を解決しながら、生活者として自立し、よりよい生活を創り出していく力を児童につけていくとする教科である。家庭科は、まさに生きていくための力をつける学習なのである。ふだん何気なく過ごしている生活をしっかりと見つめ、そこにある課題を解決する課程を通して生活をよりよくしていく意欲や技能、知識などを獲得し、自立した生活者としての成長を遂げて言ってほしいと願うのである。

現在、様々な社会の変化にともない、家庭生活の形態や家族そのものに対する価値観が多様化してきている。このように、絶えず変化する社会の中では、その変化に主体的に立ち向かい、自ら学び続ける力が必要である。また、生活に対するいろいろな情報が氾濫しているため、自分にとって本当に価値あるものを見つけ、それを生活に生かしていく力が問われてくる。

従って、そういう力をつけるためには、生活に対する自分なりの考えを持ち、実践できることが必要である。言い換えれば、自立に向かう子どもたちを育てなければならないということになるのであろう。

これらの視点から、家庭科におけるめざす子ども像をまとめると、次のようになる。

- 日常生活を見つめ、問題解決のために追求できる子ども
- 友達や家族との関わりを大切にしながら、自分らしい生活をめざして考え、実践する子ども
- 自分なりの考えで選んだり決めたりする場面を通して、更に問いかけることのできる主体的な生活者としての子ども

2 授業づくり

(1) 題材開発について

「被服」、「食物」、「家族の生活と住居」の3領域を独立させるのではなく、それらを相互にからませた題材を設定することによって、子どもたちが、自分の生活を総合的にとらえることができるようにする。また、子ども一人一人の思いや願いを生かし、子どもの興味・関心を引きつけ、思考活動が深まるような楽しい題材を工夫する。

(2) 体験的学習を取り入れる

現代の子どもたちは、自然環境や社会環境の変化にともない、生活経験が乏しい傾向にある。実際に自分の手を動かし、体を動かして体験してみることが大切である。これは技術面だけではなく、思考面でも同じことがいえる。つまり、五感を通して、学習の中で試行錯誤を繰り返しながら学習を深めていくことができるといえる。

(3) 学び方を学ぶ

学習は、学校に行く間だけ行うものではないという生涯学習の視点から、まずは自分で課題を見つけ、それを自ら追求していく力が必要である。そのためには、単に知識や技能を身につけるのではなく、自分で学習していく力、自己決定していく力などが問われてくる。自己決定するとは、環境の中から自分の目的にあったと思われるものを見つけ行動し、その環境でできる限りの情報を集め、既習経験で得たすべてを情報として判断・決定する。判断・決定するには、自分の考えや目的、すなわち生活的価値観を持っていなければならない。そこで、班学習だけでなく一人学習や課題別の調べ学習などの学習場面を設定し、一人一人が自分で選択・判断して行動できる学習場面を設定し、その学習を適切に評価していくことが必要であると思われる。

(4) 自分の生活に生かす

まずは、自分の生活を見つめる機会をできるだけ多く設け、その中から課題を見つけることができるようにする。そこから自分のめあてを持ち、学習を深め、最終的には、学習したことをまた自分の生活に返して生かしていくことができるようにする。そのためには子供たちが実践してみよう、したいなと必要感や期待感を持つような題材を選ぶことも大切である。

(5) 個の確率と友達とのかかわり

一人一人の考え、よさを大切にする。友達によさに気づくためには、まずは自分をよく知り、自分の考えを持つことが必要である。また一人一人のよさは、他とかかわることによってはじめてよさとなる。子供たちが自分のよさに気づいてそれを出し合い、友達とのかかわりを大切にする中で、よりよい生活を創造できるようになると思われる。